

フランシス・ベイコンの私的談話のレトリック
——“Of Discourse”の成立過程とその古典的背景——

松 浪 茂

ベイコンの *Essays* を解釈するとき、きわめて重要なことは、その成立過程を比較考察しながら、そのラテン語版を絶えず参照することである。*Essays* はベイコンの生涯で三度、すなわち、1597年初版（10編）、1612年第二版（38編）、1625年第三版（58編）と版を重ねるにしたがって加筆修正が施され、そのラテン語版はベイコンの死後、1638年 *Opera Moralia et Civilia* の中に *Sermones Fideles, sive Interiora Rerum*（56編）というタイトルで Dr. Rawley によって公刊された⁽¹⁾。ベイコンは晩年、*Essays* をはじめ自己の全著作を、同時代のヨーロッパの学者に向けて紹介するとともに、未完ではあるが試論という形のまま後世へのメッセージとするため、近代語である英語に信をおかず、“Universal Language”であるラテン語に翻訳し、分冊して保存しようとした⁽²⁾。なぜならラテン語こそ伝達を容易にし、かつ、書物に永遠の生命を付与すると彼は考えていたからである。近代語は書物を破産させるという彼の言葉は、実益性を重視するベイコンの性格を如実に物語っている⁽³⁾。1623年6月26日付の親友 T. Matthew にあてた書簡の中で、彼は数人の手の助けを借りて、*Proficiency and Advancement of Learning*（1605）（以下 AL と略記）、*The History of the Reign of King Henry the Seventh*（1622）をはじめ、*Essays* をラテン語に翻訳している計画を初めて表明し⁽⁴⁾、1625年秋 Father Fulgentio にあてた書簡の中で、*Essays* にとってかわって、より重々しく威厳を感じさせるラテン語のタイトルに初めて言及している⁽⁵⁾。同じく1625年、*Essays* 第三版の Buckingham 公爵に献呈した献辞から判断すれば、同版の献辞を英語とラテン語の両方の言語で同公爵に献呈する意図が献辞執筆以前か

らあったことは疑いの余地がない⁽⁶⁾。更に、同献辞の中で献辞のラテン語訳に言及するのみならず、数ある著作の中でも最も評判の良い *Essays* のラテン語版は書物が続く限り後世の人に読み続けられるであろうと *Essays* のラテン語版の未来にまで予測している点を考慮すれば、“My *Historie of Henry the Seventh*(which I have **NOW ALSO** translated into Latine)”

(ゴチック体は Arber による) という同献辞の中の一文は、Henry 7 世の伝記とならんで、*Essays* の翻訳が実質的にはすでに完了していることを暗示させるに十分である⁽⁷⁾。*Essays* の翻訳が、ベーコン自らの翻訳に加えて、数人の手によってなされたとき、すべてベーコンの指示監督の下で行なわれ、ベーコン自身による最終的監修を受けていたことは推測に難くない⁽⁸⁾。そこには、単なる英語からラテン語への翻訳という語学上の問題を超えて、削除あり、加筆あり、曖昧で不正確な英語の表現をより具体的に説明している箇所が少なくない⁽⁹⁾。これらは著者の許可なくしては行うことのできない改訂であり、著者自身でなくしては困難な作業である。英語版からラテン語版に至るまで、*Essays* 各版の成立過程を詳細に比較考察した Arber は⁽¹⁰⁾、Spedding とともに、ラテン語版を単なる英語版の解釈のヒントとなる同時代の解釈を提供する翻訳書としてのみならず、英語版の権威ある最終的定本として鑑定している⁽¹¹⁾。したがって、ベーコン死後の削除・加筆が問題なのであって、この件については、Arber はすべて Dr. Rawley の良心の問題として処理している⁽¹²⁾。

以上のようなラテン語版の意義と限界を念頭におきながら、初版から第三版に至る“Of Discourse”の英語版とそのラテン語版“De Discursu Sermonum”を比較考察してみるなら、削除・加筆の状況は一目瞭然である。すなわち、原文の削除例はわずかに一例“or dry blow”⁽¹³⁾しか認めることができない。加筆例の多くは、原文をより具体的により説明的に解釈した意識である。原文にない加筆例としては、“Etiam qui sermonis familiaris dignitatem tueri capit, [alliis vices loquendi relinquat.]”⁽¹⁴⁾ および “[instar campi aperti,] in quo spatium licet; non viæ regiæ, quæ deducit domum.”⁽¹⁵⁾ の二例をあげることができよう。しかしながら、英語版とラ

テン語版を比較しながら解釈する際、その解釈を非常に困難にしている興味深い一文がある。すなわち、談話のときに自己に関わる話はできるだけ避けるように説いた下りで、自画自賛の例外的なケースを述べた箇所である。

and there is but one case wherein a man may commend himself with good grace ; and that is in commending virtue in another ; especially if it be such a virtue whereunto himself pretendeth.⁽¹⁶⁾

Vix occurrit casus aliquis, in quo se laudare quis decore possit, præter unum : is est si virtutem alterius laudet : sed eam intelligo virtutem, ad quam ipse aspirat.⁽¹⁷⁾

問題の箇所は、“pretendeth” = “aspirat” の解釈である。OED によれば、“*To pretend to*” の用法は多義的である⁽¹⁸⁾。すなわち、(a) “*To aspire to, aim at, make pretension to ; to be a suitor or candidate for*” (初出例1481. Caxton), (b) “*spec. To make suit for, try to win in marriage*” (初出例1652 J. Wright), (c) “*To lay claim to ; to assert a right of ownership to*” (初出例1647 Clarendon), (d) “*To claim or profess to have ; to make profession of having ; to affect*” (初出例1659 Hammond), (e) “*To make pretensions or claims on behalf of, to support the claims of*” (初出例1650 T. Vaughan) の五通り考えられる。他方、“*ad quam ipse aspirat*” の解釈は、内容的にも語法的にも必然的に限定されてくる。すなわち、Lewis and Short の *A Latin Dictionary* によれば、ここでの “*aspiro*” は、“*I. Neutr. B. To aspire to a person or a thing, to desire to reach or obtain, i. e. to approach, come near* (esp. with the access. idea of striving to attain to) ; constr. with *ad, in with acc., the dat., a local adv., or absol.*”⁽¹⁹⁾ でなければならない。したがって、“*whereunto … pretendeth*” の解釈として、OED の定義 “*To aspire to, aim at, make pretension to*” が最有力候補として登場してくる。このことは、初出例の年代からみても

妥当である。研究史的には、英語版とラテン語版を比較考察した W. Aldis Wright (1862)⁽²⁰⁾ のみが、同箇所を “to make pretension” と解釈しているにすぎない。同様に英語版とラテン語版を詳細に比較研究したはずの J. Spedding (1861)⁽²¹⁾ から、E. A. Abbott (1870)⁽²²⁾, E. Arber (1871)⁽²³⁾, F. Storr and C. H. Gibson (1885)⁽²⁴⁾, S. H. Reynolds (1890)⁽²⁵⁾, A. S. West (1897)⁽²⁶⁾ を経て、*Essays* の最初の本文批評をなしとげた M. Kiernan (1985)⁽²⁷⁾ に至るまで、同箇所の注釈については硬く沈黙をまもっているのは不可解である。このことは、“pretendeth” = “aspirat” の解釈を暗示しているように思われる。他方では、それとは対照的に、R. Whately (1857)⁽²⁸⁾ 以来、F. G. Selby (1889)⁽²⁹⁾, 成田成寿 (1948)⁽³⁰⁾, C. J. Dixon (1963)⁽³¹⁾, E. Schücking (1970)⁽³²⁾ は伝統的に同箇所を “lay(s) claim to” と解釈しているのであるが、H. Lewis (1893)⁽³³⁾ の注釈書も R. Ahrens (1974)⁽³⁴⁾ の研究書も同箇所の解釈について一言も触れていない。“whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to” の解釈は、OED の定義 “To lay claim to ; to assert a right of ownership to” に一致している。初出年代は 1647 Clarendon であるが、OED の初出年代は厳密性を欠き、かなり修正を必要としている箇所が少なくない⁽³⁵⁾。また、同箇所の内容から判断する限り、OED の定義 (b), (d), (e) は妥当ではない。したがって、“whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to” の解釈も、内容的にも語法的にも、十分成立し得るといえることができる。ただし、ベイコンの意図が “whereunto … pretendeth” = “aspire to” である場合、ラテン訳 “aspirat” は同時代の解釈として正しい情報を提供していることになる。その際、ベイコンの生前の改訂であるか、死後の改訂であるかは全く問題ではない。しかしながら、ベイコンの意図が “whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to” である場合、ラテン訳 “aspirat” がベイコン自身の最終的監修を受けたかどうか問題になってくる。すなわち、ベイコン自身の改訂か、もしくは、他者の削除・加筆ということに問題がかかわってくるのである。

以上のような予備的考察から明らかになった問題点の解決のため、本稿

では、方法論的には、ベイコンの哲学上の源流を総体的に研究した E. Wolff (1910)、“Of Death”の文学的背景を扱った M. Walters (1940)、“Of Beauty”を構成する各行の源流について徹底的に比較考察を行った A. Philip McMahon (1945)、“Architect of Fortune”という社会的人間論の重要な観念の背景を探究した Rexmond C. Cochrane (1958)と同じ手法が用いられた。すなわち、“Of Discourse”を構成要素に分析し、その背景となる源流を比較考察することにより、問題箇所の解釈が明らかになったと思われる。その意味では、本稿は、Raynolds から Kiernan に至る一連の研究成果に修正を施し、これを補足する影響史の一考察であるとともに、問題点の解明に指針を与えようと試みた作品内解釈でもある。

I

“Of Discourse”の源流の解明については、何といても、Raynoldsの功績が大きく、Cicero (106—43 BC), Plutarch (46—120?), Pliny (62?—113)の三人の名があげられているが、とりわけ、Ciceroの道徳論 *De Officiis*, i. 37 および 38 が、この談話に関するエッセイ全体の基調になっているという⁽³⁶⁾。確かに、公的弁論術 (contentio) の規則はあるが、私的談話 (sermo) の規則はなく、なぜないのかわからないという Ciceroの一文 (*De Officiis*, i. 37) が、ベイコンの“Of Discourse”成立の学問的出発点となっていると思われる⁽³⁷⁾。このことは、*De Dignitate et Augmentis Scientiarum* (1623) (以下 *De Aug.* と略記)の中で“De Prudentia Sermonis Privati” (私的談話の知恵) が *Desiderata* の一つとしてあげられていることと符合する⁽³⁸⁾。ルネッサンスとともに、Ciceroをはじめローマ時代の弁論術が復活したが⁽³⁹⁾、その主要五項目、すなわち、(1) *Inventio* (2) *Dispositio* (3) *Elocutio* (4) *Memoria* (5) *Pronuntiatio*のうち、(1)から(4)までは、ベイコンの学問分類の枠組みの名称として使用された⁽⁴⁰⁾。Ciceroの弁論術の用語が変容してベイコンの学問体系の中に取り入れられたのに対して、Ciceroの私的談話のレトリックは問題提起としてベイコンに受け

とめられ、ベーコンの中で成長発展をとげたということができよう。

“Of Discourse”における Plutarch とベーコンの関係については、Raynolds の指摘は二箇所、すなわち、話題の貧困さ、多様性の欠如は人をうんざりさせるという箇所、および、自画自賛しても体裁の悪くない場合を説いた箇所のみである。前者の場合、Plutarch “The Education of Children” の “for monotony is in everything tiresome and repellent, but variety is agreeable, as it is in everything else, as, for example, in entertainments that appeal to the eye or the ear.”⁽⁴¹⁾ が指摘され、後者の場合、“On Inoffensive Self-Praise” の “We must therefore look warily to ourselves when we recount praise received from others and see that we do not allow any taint or suggestion of self-love and self-praise to appear,”⁽⁴²⁾ が指摘されている。しかしながら、後者の場合、Raynolds の指摘は引用の厳密性を欠いていると思われる。なぜなら、Raynolds の引用箇所は、自己讃美のレトリックとして他人を賞賛する際、相手にさとられないように純粋無垢になって相手を賞賛しなければならないという実践的心構えについて説いた箇所であり⁽⁴³⁾、他人を賞賛しながら自己讃美をなしとげる一般的原则については、同じエッセイの別の箇所で説かれているからである。すなわち、“Ἐπεὶ δὲ τῷ μὲν ἑαυτὸν ἐπαινοῦντι πολεμοῦσιν οἱ πολλοὶ σφόδρα καὶ ἄχθονται, τῷ δὲ ἕτερον οὐχ ὁμοίως, ἀλλὰ καὶ χαίρουσι πολλάκις καὶ συνεπιμαρτυροῦσι προθύμως, εἰώθασιν ἔντοι τοὺς ταῦτὰ προαιρουμένους καὶ πράττοντας αὐτοῖς καὶ ὅλως ὁμοιοτρόπους ἐπαινοῦντες ἐν καιρῷ συνοικειῶν καὶ συνεπιστρέφειν πρὸς ἑαυτοὺς τὸν ἀκροατὴν ἐπιγινώσκει γὰρ εὐθὺς ἐν τῷ λέγοντι, κἂν περὶ ἄλλου λέγηται, δι’ ὁμοιότητα τὴν ἀρετὴν τῶν αὐτῶν ἀξίαν ἐπαίνων οἶσαν. ὡς γὰρ ὁ λοιδορῶν ἕτερον οἷς αὐτὸς ἐνοχὸς ἐστὶν οὐ λανθάνει λοιδορῶν μᾶλλον ἑαυτὸν ἢ ἐκεῖνον, οὕτως οἱ ἀγαθοὶ τοὺς ἀγαθοὺς τιμῶντες ἀναμιμνήσκουσιν αὐτῶν τοὺς συνειδότας ὥστε εὐθὺς ἐπιφωνεῖν ‘σὺ γὰρ οὐ τοιοῦτος;’”⁽⁴⁴⁾ この箇所は、“whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to” と解するなら、上述したベーコンの問題箇所と符号している。とりわけ、自己讃美を意図している人と賞賛される人との間に、考え・行為・気質の

類似性がある場合に、自己讃美のレトリックが功を奏するという自画自賛の成立条件において、Plutarch とベイコンは一致している。Plutarch では、他者を賞賛する際の実践的心構えが説かれているのに対して、ベイコンではこの点に全く触れていないということが言えよう。また、Plutarch の説く自己讃美の方法は実益的色彩がきわめて強く、同じエッセイを次のように締めくくっている。“... ἀφεξόμεθα τοῦ λέγειν περὶ αὐτῶν, ἂν μὴ τι μεγάλα μέλλωμεν ὠφελεῖν ἑαυτοὺς ἢ τοὺς ἀκούοντας.”⁽⁴⁵⁾ この箇所はベイコンの “Speech of a mans selfe is not good often”⁽⁴⁶⁾ (1597, 1612), “Speech of a man’s self ought to be seldom, and well chosen.” (1625)⁽⁴⁷⁾ に符合していると思われる。そこには確かに、Cicero の “Deforme etiam est de se ipsum praedicare falsa praesertim” (*De Officiis*, i. 38) の直接的影響の跡を読み取ることができるが、“not good often” から “seldom, and well chosen” への移行の中に、積極的否定から消極的否定へのニュアンスの転換が見られる。これこそ、まさに、自己讃美の例外的ケースを述べた Plutarch の実益的性格の反映であると思われる。

ところで、以上のような Plutarch の実益的、実践的方法ときわめて類似している方法を説いているのが Pliny であり、ベイコンはこれを1612年第二版で初めてあらわれた “Of Vain Glory” の中で直接引用している。“For excusations, cessions, modesty itself well governed, are but arts of ostentation. And amongst those arts there is none better than that which Plinius Secundus speaketh of, which is to be liberal of praise and commendation to others, in that wherein a man’s self hath any perfection. For saith Pliny very wittily, *In commending another you do yourself right; for he that you commend is either superior to you in that you commend, or inferior. If he be inferior, if he be to be commended, you much more; if he be superior, if he be not to be commended, you much less.*”⁽⁴⁸⁾ Pliny の原文では以下のように続いている。“Tanto magis ne invideris; nam qui invidet minor est. Denique sive plus sive minus sive idem praestas, lauda vel inferiorem vel superiorem vel parem: superiorem

quia nisi laudandus ille non potes ipse laudari, inferiorem aut parem quia pertinet ad tuam gloriam quam maximum videri, quem praecedis vel exaequas.”⁽⁴⁹⁾ Pliny の文脈は、Raynolds も指摘しているように、文学作品の私的朗読会であるが⁽⁵⁰⁾、ベイコンにおいては Pliny の技巧を一般化させていることは明らかである⁽⁵¹⁾。Abbott の指摘を待つまでもなく、直接引用にもかかわらず、曖昧で不正確な引用と言わざるをえない⁽⁵²⁾。Pliny において、嫉妬心をおこすのは相手よりも劣った証拠として、嫉妬心を戒めた一文が削除され、かわって、“*In commending another you do yourself right*” が挿入されている。また、Pliny では、賞賛の相手が自己よりも優れているか、劣っているか、または、同等であるか、いずれかの場合を想定しているのに対し、ベイコンの引用文では相手の技量が自己と同等の場合を削除している。しかし、この最後のケースは、ベイコンの “...to be liberal of praise and commendation to others, in that wherein a man’s self hath any perfection.” の中に生きていると思われる。これこそ、とりもなおさず、Plutarch の技法そのものである。Pliny では、相手にさとられないように純粋無垢に賞賛するという Plutarch の実践的心構えが欠けている点を除けば、Plutarch にしても Pliny にしても、自己讃美という目的を他者を賞賛するという方法によって為し遂げようとする点では共通している。ただし、自画自賛のレトリックの成立条件として、Plutarch では自己の技量と賞賛される相手の技量がほぼ同等の場合を想定しているのに対して、Pliny では自己の技量が賞賛される相手と同等か、もしくは、賞賛される相手よりも優れている場合を想定している点において異なっているといえよう。したがって、自画自賛のレトリックの成立条件として、自己と賞賛される相手の技量が同等である場合を想定する限り、“whereunto ... pretendeth” = “lay(s) claim to” という読み方の中に Plutarch = Pliny の影響の痕跡を確かに認めることができるのである。

他方、ベイコンの意図が “whereunto ... pretendeth” = “aspire to” の場合であっても、その解釈を支持し、その解釈成立に根拠を与えていると思われる源流がある。これは、Raynolds はもちろん他のいかなる研究者に

よっても指摘されていない。Plutarch “How To Profit by One’s Enemies”の中で、敵を賞賛する効果が以下のように述べられている。“ὄθεν οὐδ’ ἐπαίνου φειστέον οὐδὲ τιμῆς περὶ ἀνδρὸς ἐχθροῦ δικαίως εὐδοκιμήσαντος. ἐπαίνων τε γὰρ φέρει μείζονα τοῖς ἐπαινοῦσι, καὶ πίστιν ἔχει πάλιν ἐγκαλῶν, ὡς οὐ τὸν ἀνδρὰ μισῶν ἀλλὰ τὴν πράξιν ἀποδοκιμάζων· τὸ δὲ κάλλιστον καὶ χρησιμώτατον, ἀπωτάτω καθίσταται τοῦ φθονεῖν καὶ φίλοις εὐτυχοῦσι καὶ κατορθοῦσιν οἰκείοις ὁ τοὺς ἐχθροὺς ἐθισθεῖς ἐπαινεῖν καὶ μὴ δάχνησθαι μηδὲ βασκαίνεω εὐ πράττοντων. καίτοι τίς ἄσκησις ἐτέρα μείζονα ὀφέλειαν ἐνεργάζεται ταῖς ψυχαῖς ἢ διάθεσιν κρείττονα τῆς ἀφαιρούσης τὸ δόσζηλον ἡμῶν καὶ φιλόφθονον;”(53) 評判の良い敵に対して賞賛や尊敬の念を惜しまない方が、かえって賞賛した人に大きな賞賛が与えられるとする点では、上述したの技法と全く同一である。しかしながら、嫉妬心を克服する努力をすることにより、心の中に大きな利益 (μείζονα ὀφέλειαν), より良き気質 (διάθεσιν κρείττονα) が生れるとする点は、道徳的進歩、内的成長と直接かかわってくる。同様の趣旨は、Plutarch “Progress in Virtue”の中で明瞭に述べられている。“σμεκρὸν οὖν οἶεσθαι χρὴ προκόπτειν, ἄχρι οὐ τὸ θαυμάζειν τοὺς κατορθοῦντας ἀργὸν ἔχομεν καὶ ἀκίνητον ἐξ ἑαυτοῦ πρὸς μίμησιν. οὔτε γὰρ ἔρωσι σώματος ἐνεργός, εἰ μὴ μετὰ ζηλοτυπίας ἔνεστιν, οὐτ’ ἐπαινοσ ἀρετῆς διάπυρος καὶ δραστήριος ὁ μὴ νύττων μηδὲ κεντρίζων μηδὲ ποιῶν ἀντὶ φθόνου ζῆλον ἐπὶ τοῖς καλοῖς, ἀναπληρώσεως δρεγόμενον.”(54) 成功者に対する賞賛 (τὸ θαυμάζειν) が、単に嫉妬心を伴った賞賛にとどまる限りは、内的進歩は見られなく、賞賛することにより心がかきたてられ、模倣しようとする (πρὸς μίμησιν) 努力するようにならなければ熱心な賞賛といえないと説く。ここで強調されているのは、賞賛する人の技量よりも賞賛される人の技量が優っているような人間関係における賞賛から模倣へのダイナミックな転換である。これをベイコンの問題箇所にあてはめて解釈してみるならば、ベイコンの言う他人の美德を賞賛する自画自賛の例外的な場合とは、自己よりもすぐれた美德の持ち主に対して単に賞賛するのみならず、その美德に一歩でも近づくことと熱望し (pretendeth = aspire) 努力するよう

な場合をいっていることになる。ところで、自己よりもすぐれた美德の持ち主を熱心に賞賛することが内的進歩こそなれ、はたして自己讚美につながってくるのであろうか、ひいては自分自身の話になるのであろうか、という素朴な疑問が残らないわけでもない。しかしながら、自己の技量が相手の技量よりも劣っているとはいえ、嫉妬心を抑制して限りなく相手の技量に近づくことと努力している心境を公衆の面前で告白し、その決意を明らかにしてみせることによって、かえって自己の精進的成長を披瀝することになり、間接的に自己の美德を公開していることになる。そうすることによって、逆に、聴衆から嫉妬心を克服した美德の持ち主という賞賛を得ることにつながる。それゆえ、ベイコンの意図が“whereunto … pretendeth” = “aspire to” の場合であっても、そこに Plutarch の影響の痕跡を確かに読み取ることができるといえよう。

さらに、“Of Discourse”における Plutarch の影響を支持するような Plutarch とベイコンの一般的類似点について触れてみたい⁽⁵⁵⁾。両者の共通点として、第一に比喩の使用法（馬の手綱、塩粒、医学用語）、第二に実践的・実益の性格が指摘できよう。Plutarch の饒舌の弊害について述べたエッセイ “Concerning Talkativeness” の中で、おしゃべり屋のおしゃべりの衝動を抑制することの困難さが馬の手綱の比喩（ὡς χαλινῶν ἐφαφαιμένους）を用いて述べられている箇所がある。“Ὁὐ γὰρ ἔστιν ὡς χαλινῶν ἐφαφαιμένους ἐπισχεῖν τὸν ἀδολέσχην, ἀλλ’ ἔθει δεῖ κρατῆσαι τοῦ νοσήματος.”⁽⁵⁶⁾ この箇所は、ベイコンの談話のエッセイの中の Ovid の直接引用句 “Parce puer stimulis, et fortius utere loris.”⁽⁵⁷⁾ を思わせる。ここは、1625年第三版になって加筆された箇所だ、毒舌の衝動の抑制が馬の手綱の比喩を用いて述べられている。また、同じ饒舌の弊害についてのエッセイの中で、饒舌を言葉の無駄無益とみなして、お互いに相手に喜びを与えるような談話の効果が塩粒の比喩（“ὡσπερ ἄλας τοῖς λόγοις ἐφήθύνουσι τὴν διατριβὴν”）を用いて述べられている。“ἀλλ’ ἢ δι’ αὐτοὺς ἀνθρώποι δεόμενοι τινος λαλοῦσιν ἢ τοὺς ἀκούοντας ὠφελούντες ἢ χάριν τινα παρασκευάζοντες ἀλλήλοις ὡσπερ ἄλας τοῖς λόγοις ἐφήθύνουσι τὴν διατριβὴν καὶ τὴν πρᾶξιν

ἐν ἡ τυγχάνουσιν ὄντες.⁽⁵⁸⁾ この箇所は、草案として残っている Prince Henry に献呈される予定であった *Essays* 第二版の献辞の中で、*Essays* を定義して飽き飽きさせるよりもむしろ食欲をそそる塩粒のようなものと表現している箇所を思わせる。“But my hope is, they may be as grains of salt, that will rather give you an appetite than offend you with satiety.”⁽⁵⁹⁾ また、Plutarch の医学的比喩については、おびただし数の用例が指摘できる⁽⁶⁰⁾。饒舌、知りたがり、弱気、自画自賛、借金など人間が生れつき持っているような性格を病気とみなし、医学的比喩をちりばめながらその治療法を説いている。Plutarch に劣らず、医学的比喩についてはベイコンも好んで多用しているが⁽⁶¹⁾、両者共に同じ文学的手法を用いているといえることができる。ベイコンの時代は、ベイコン自身比較解剖学を提唱し⁽⁶²⁾、W. Harveyが血液循環説を確立するなど著しい医学上の発展を見た時代であった⁽⁶³⁾。*Sylva Sylvarum or A Natural History* (1627) および医学的な論文において、ベイコン自身科学者として数々の医学的実験を行なっているところから、医学的比喩が多用されても一応納得することができる。しかし、伝記作家でもあり道徳哲学のエッセイストでもあったローマ時代のギリシア人 Plutarch が、いかなる背景から、いかなる医学的知識に基づいて医学的比喩を多用しているのか、今後の問題としておきたい。次に、両者の一般的類似点として、実践的実益性を重視する性格が指摘できよう。すでに述べたように、自画自賛のレトリックについて述べたエッセイにしても、饒舌の弊害について対象療法を述べたエッセイにしても、Plutarch の特徴として、実践的実益の性格がきわめて色濃くにじみ出ていた。このような性格は、とりもなおさず、ベイコン思想の最大の特徴でもある。例えば、*Essays* 初版献辞にあらわれた実益性を自負する性格、および、医学的比喩の使用の中に Plutarch の影響の痕跡を読み取ることができると思われる。“And as I did euer hold, there mought be as great a **VANITIE** in retiring and withdrawing mens conceites (except they bee of some **NATURE**) from the world, as in obtruding them: So in these particulars I haue played my selfe the Inquisitor, and find noth-

ing to my vnderstanding in them contrarie or **INFECTIOUS** to the state of Religion, or manners, but rather (as I suppose) **MEDICINABLE**”

(ゴチック体は筆者による。)⁽⁶⁴⁾ Plutarch を読めば読むほど、そこにベーコンとの類似点を発見して、啞然とする程である。

II

“Of Discourse”における Cicero の道徳論と Plutarch のエッセイの影響を考える際、それぞれの直接的影響の痕跡の他に、ベーコンの独創性として両者の融合の跡も指摘することができる。すなわち、人間の心理にかなり高い関心を持っていたベーコンは、談話のレトリックの中に心理的視点を導入、徹底して相手に対する配慮を重視した Cicero の談話のレトリックと、自己の利益を第一の目的とした Plutarch の政治的・実益的な談話の技巧をたくみに融合させ、談話というものを常に利己的・自己防御的な側面と、その目的を遂行する手段としての相手に対する配慮という両面から考察している。1612年第二版で加筆された “Certainly, he that hath a satirical vein, as he maketh others afraid of his wit, so he had need be afraid of others’ memory.”⁽⁶⁵⁾ の中の、毒舌家は相手の記憶力を恐るべしという注告は、相手の心理を配慮して自己防御的である。また、初版からあった、相手の技量に合わせて質問する者は知識を増加させると共に、相手を満足させるという一文、すなわち、 “He that questioneth much, shall learn much, and content much; but especially if he apply his questions to the skill of the persons whom he asketh; for he shall give them occasion to please themselves in speaking, and himself shall continually gather knowledge.”⁽⁶⁶⁾ は利己的であると共に、心理的効果をねらった相手に対する配慮のほとぼしりでもある。同じく初版からあった、自己の知識の隠蔽の効果を説いた箇所 “If you dissemble sometimes your knowledge of that you are thought to know, you shall be thought another time to know that you know not.”⁽⁶⁷⁾ は、自己の弱点を守る点で自己防御的であると共

に、きわめて高度な心理的な作戦といえる。このように、ベイコンは Cicero や Plutarch の知恵を吸収して、これを融合させ、大きく成長発展させたのであるが、“Of Discourse”の中で述べられているもろもろの私的談話のレトリックは、すべて次の一文の中に収斂されて行く。すなわち、話の思慮分別の方が弁論術の主要五項目の一つである Elocutio、および、Distributio に優るとする初版からあった一文である。“Discretion of speech is more than eloquence; and to speak agreeably to him with whom we deal, is more than to speak in good words or in good order.”⁽⁶⁸⁾ 以下に続く、うまい相槌を打ちながら、話の内容に首尾一貫性をもたせ、話がとぎれないように話す話し方を述べた初版からあった一文 “A good continued speech, without a good speech of interlocution, shews slowness; and a good reply or second speech, without a good settled speech, sheweth shallowness and weakness.”⁽⁶⁹⁾ および、序論の適度の長さについて触れた初版からあった一文 “To use too many circumstances ere one come to the matter, is wearisome; to use none at all, is blunt.”⁽⁷⁰⁾ も話の思慮分別の具体例であると思われる。以上のような話の思慮分別を重視した一文は、Cicero の “Animadvertendum est etiam, quatenus sermo delectationem habeat, et, ut incipiendi ratio fuerit, ita sit desinendi modus.”⁽⁷¹⁾ (*De Officiis*, i. 37) に符合している。しかしながら、Cicero にあっては、相手を快適にさせるような話し方は依然として談話のレトリックの一部としてとらえられていた。このことは、Cicero が公的弁論術の言葉と文の規則が私的談話にも適応されると考えている点からも明らかである。“quamquam, quae verborum sententiarumque praecepta sunt, eadem ad sermonem pertinebunt.”⁽⁷²⁾ (*De Officiis*, i. 37) それに対して、ベイコンでは、相手を快適にさせるような話し方は、レトリックの一部である Elocutio, Distributio よりも優位が与えられている。Cicero と Plutarch を融合させた点に限らずこの点においても、ベイコンは Cicero を凌駕しているといえる。

談話のエッセイにおけるベイコンの独創性の第二の特徴として、彼の用

いる比喩および語法の斬新さを指摘することができる。第二版、第三版の加筆の多くは、例証部分 (exempla) に集中しており、比喩的説明および引用箇所が大部分である。毒舌の衝動を抑制する必要を説く箇所で、毒舌の塩辛さ (saltness) とほろ苦さ (bitterness) の区別が、1612年明らかにされた。OED によればこれは “saltness” を “Piquancy, poignancy” の意味で使用したベイコン初出例である。 *Sylva Sylvarum* (1627) および *Novum Organum* (1620) において、味覚の研究をしたベイコンならではの比喩と思われる⁽⁷³⁾。また、他人に差し障りのある話は避けるように説いた箇所では、1612年談話の自由の象徴として野原の比喩が加筆された。

“for discourse ought to be as a field, without coming home to any man.”⁽⁷⁴⁾ すでに指摘したように、ラテン訳では “[instar campi aperti,] in quo spatium licet; non viæ regiæ, quæ deducit domum.”⁽⁷⁵⁾ (自由に歩きまわれる [野原のように], 宮殿に通じている王様の道ではなく。) と改訂されている。これは AL の中で、真理探究を鹿狩に喩え、“Invention of Arts and Sciences” および “Invention of speech or argument” を、それぞれ、囲いのない森での鹿狩と囲いのある猟園での鹿狩に喩えている点を思わせる⁽⁷⁶⁾。これはフィールドワークが必要な自然科学者であったベイコンにふさわしい比喩であると思われる⁽⁷⁷⁾。さらに、“A good continued speech, without a good speech of interlocution” および “a good reply or second speech, without a good settled speech” が、1625年それぞれ、“the greyhound” と “the hare” に喩えられた⁽⁷⁸⁾。この直線コース型と方向転換型の動物の比喩はすでに AL の中で “orators” と “sophisters” に使用されているが⁽⁷⁹⁾、私的談話のタイプの中に、ベイコンは弁論家型と詭弁家型を読み取り、両者の統合を試みたといえるであろう。最後に、1625年の加筆例として “leads the dance” および “galliards” を考えてみたい。初版からあった “The honourablest part of talk is to give the occasion; and again to moderate and pass to somewhat else;”⁽⁸⁰⁾ は、Cicero の “Danda igitur opera est, ut, estiamsi aberrare ad alia coeperit, ad haec revocetur oratio, sed utcumque aderunt; neque enim isdem de rebus

nec omni tempore nec similiter delectamur.”⁽⁸¹⁾ にほぼ符合していると思われる。Cicero にあっては、どちらかと言えば、話題の司会役の方に重点がおかれているのに対して、ベイコンでは、話し手の順番を考慮する司会役の方に重点がおかれている。さらに、Cicero にあっては、話題の司会役は談話のレトリックの一部にすぎないが、ベイコンにあっては、談話の中で最高の座が与えられている点注目に値する。このような文脈の中で“for then a man leads the dance.”⁽⁸²⁾ が加筆され、話の司会役は舞踏の比喻で美事に表現された。同じ趣旨は、話の順番を考慮する必要を説いた箇所、話の場を独占する者の対処法を説いた1625年の加算箇所にもあらわれている。“And let him be sure to leave other men their turns to speak. Nay, if there be any that would reign and take up all the time, let him find means to take them off, and to bring others on; as musicians use to do with those that dance too long galliards.”⁽⁸³⁾ このように、“leads the dance” にしろ “galliards” にしろ、宮庭人としてのベイコンを彷彿させる音楽的な表現である⁽⁸⁴⁾。また、ベイコンの語法については、新語を好む傾向が顕著である。話題の多様性の欠如は人をうんざりさせると警告する箇所で、1625年 “for it is a dull thing to tire, and, as we say now, to jade, any thing too far.”⁽⁸⁵⁾ が加筆された。本人も述べているように、これは当時の流行語であった。すでに、“saltness” をベイコン初出例 (1612) として指摘したが、“without coming home to any man” の中の “come home to” も “touch, affect, or move intimately” の意味でベイコン初出例 (1612) である⁽⁸⁶⁾。他に、OED の指摘する初版の初出例としては、“moderate”⁽⁸⁷⁾、“jest”⁽⁸⁸⁾、“content”⁽⁸⁹⁾、“touch”⁽⁹⁰⁾、“interlocution”⁽⁹¹⁾、“circumstances”⁽⁹²⁾ などがある。またすでに述べたように、ベイコンの意図が “whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to” であるなら、初出例として “pretend” をここに加えることができよう。

以上の考察から、ベイコンの意図が “whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to” の場合であれ、“whereunto … pretendeth” = “aspire to” の場合であれ、いずれにせよ、そこに Plutarch の影響の痕跡を確かに読み取る

ことができた。したがって、両解釈ともに成立することができると言える。ただし、すでに述べたように、ベーコンの意図が“whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to”であるなら、ラテン語訳“aspirat”がベーコンの最終的鑑修を受けていたのか、あるいは、他者の手による削除・加筆なのか、という問題にかかわってくる。前者の場合ならば問題はない。しかしながら、後者の場合考えられることは、他者がPlutarchの影響を受けて“aspirat”と改訂したのか、あるいは、他者がベーコンの好んで使用する新語法の“whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to”に気づかず、旧語法の“whereunto … pretendeth” = “aspire to”として解釈し、誤訳に陥ったのか、そのいずれかである。実際問題として、筆者の全く個人的な印象では、英語版のベーコンの意図では“whereunto … pretendeth” = “lay(s) claim to”であり、Plutarch = Plinyの技法に得意になっていたが、晩年になってPlutarchの説く徳の進歩に目覚め、“aspirat”と改訂したように思われる。このような読みの方が、ベーコンの精神的成長を認めることになり、若きベーコンから円熟したベーコンに至るまで、ベーコン像の変遷も実にダイナミックに映じてくる。*Essays*というタイトルについては、ベーコンはMontaigneの*Essais* (1580)から直接借用し、その意味内容を従来の“trying or testing”から“A composition of moderate length on any particular subject, or branch of a subject; originally implying want of finish” (OED)に意味変化させた。De Aug.において“De Prudentia Sermonis Privati”がDesiderataの一つに挙げられた点を再考してみるなら、Ciceroの問題提起にしたがい、Plutarch = Plinyの大きな影響を受けながら、ベーコンの中で加筆修正されて成長発展をとげた“Of Discourse”は、まさに語源的な意味で*Essays*と呼ぶにふさわしいと言えよう。この談話のエッセイと一部重複している“Short Notes for Civil Conversation” (執筆年代不詳)が残されていることも、この辺の事情を物語っている。一方では、Ciceroを評して、ギリシア哲学の解説に歴史上の例証という衣をかぶせたローマ人ということが許されるなら、ベーコンを評して、Ciceroの道徳論やPlutarchのエッセイの解説の中で、斬新な語法や比喩を用い

た例証を縦横に駆使しながら、時には大法官として、時には自然科学者として、その観察するところを自由に語ったエッセイストということが出来るだろう。しかしながら、他方では、私的談話のレトリックに心理的な視点を導入して Cicero と Plutarch を巧みに融合させ、話の思慮分別をレトリックの一部である Elocutio や Distributio よりも重要視し、話の司会役を談話のレトリックの最高の座にすえるなど、その学問的開拓、および、未来への展望に大いに貢献した哲学者ということができよう。そのようないろいろな意味で、この私的談話の知恵は、真理概念が多様化して価値観が混乱している現代にあっても、今日的意義を失ってなく、きわめて現代的であるといえる。今後の問題として、*Essays* 全体に及ぼした Plutarch の影響の総体的検証が残されている。さらに *Essays* を構成しているすべての原流について、その受容と変容を吟味検証する必要がある。これについては、稿をあらためて述べてみたい。

(昭和63年9月30日脱稿)

注 作品引用は Spedding 版により、Works と略記。

- (1) Works VI, pp.367-370.
- (2) Works XVI, pp.531-533.
- (3) Works XIV, p.429.
- (4) Ibid.
- (5) Works XIV, pp.531-533; Montagu, Note 3 I.
- (6) Works VI, p.373.
- (7) Arber, Introduction, xl.
- (8) Works VI, p.7.
- (9) Works VI, p.7; Arber, Introduction, xl.
- (10) Arber, p.5 から判断する限り、1597年初版では総表紙の次に位置していた献辞が、1598年のリプリント版では *Essays* の目次の次に移動して印刷されたことが判明。以後、三作品を含んでいた初版献辞は *Essays* だけの献辞として限定されて解釈されることになる。拙稿「ペイコン『随筆集』——初版献辞の書誌学的、文学的意義——」の疑問点が解明。

- (11) Works VI, pp.367-370 ; Arber, Introduction, xl. 全集本の編者 Spedding はラテン語版がベイコン死後12年を経て出版された点を重視, ベイコンの死去の時点で翻訳未完成の箇所が残っていた可能性なくもなしと指摘するも, ベイコンの生前の編集方針が継続されたであろうと推測して, ラテン語版を最終的定本として鑑定。
- (12) Works, ibid.
- (13) Arber, p. 21.
- (14) Arber, p. 19.
- (15) Works VI, p. 456 ; Wright, p. 329 ; Arber, p. 21 ; Selby, p. 228 ; Reynolds, p. 235 ; West, p. 218.
- (16) Works VI, p. 456.
- (17) *The Works of Francis Bacon in Ten Volumes*, X, p. 87.
- (18) OED, VIII, p. 1327.
- (19) Lewis and Short, p. 176.
- (20) Wright, p. 378.
- (21) Works VI, pp. 455-457.
- (22) Abbott, II, pp. 208-210.
- (23) Arber, pp. 14-23.
- (24) Storr and Gibson, pp. 503-504.
- (25) Reynolds, pp. 233-237.
- (26) West, pp. 217-218.
- (27) Kiernan, pp. 237-238.
- (28) Whately, p. 324.
- (29) Selby, p. 228.
- (30) 成田成寿注釈, *The Essays*, p. 284. 邦訳では, ラテン訳を参照した高橋五郎訳「并は己が自ら尊ぶ美德を或る他の人の身上に認めて」のみ Wright 系に属し, 神吉三郎訳「特に彼自身もそれを有してゐるといふ自信が有るやうな美点を賞めることである」から, 成田成寿訳「特にそれが自分自身でもっていると思つてゐるやうな徳性である場合である」を経て, 渡辺義雄訳「とくにそれが自分ももつてゐると言えるやうな美点であるときに」まで Whately 系に属す。
- (31) Dixon, pp. 66-68, p. 192, pp. 231-234.
- (32) Schücking, p. 115. “...zumal solche Tugenden, auf welche man selbst Anspruch erhebt.”
- (33) Lewis, pp. 187-190.
- (34) Ahrens, pp. 122-123.
- (35) 宮部菊男, p. 93.

- (36) Raynolds, pp. 235-237, p. 359. Plutarch, *Morala* については、Raynold は Holland Translation (1657) を使用。Raynolds は、“a vain that would be bridled”——“Sed quo modo in omni … et vereri et diligere videamur” (*De Off.* i. 38); “let him be sure to leave other men their turns etc.”——“Sit ergo hic sermo … ita sit desinendi modus.” (*De Off.* i. 37); “Speech of a man’s self etc.”——“Deforme etiam est de se … imitari militem gloriosum.” (*De Off.* i. 37) を除く他の箇所については出典の明示を避け、ただ暗示するにとどまっているので、ここで簡単に指摘しておきたい。(1)“It is good in discourse and speech of conversation to vary and intermingle … jest with earnest”——“insit in eo lepos” (2)“As for jest, there be certain things which ought to be privileged from it”——“si seriis, severitatem adhibeat, si iocosis, leporem” (3)“Speech of touch towards others should be sparingly used”——“cum studiose de absentibus detrahendi causa aut per ridiculum aut severe maledice contumelioseque dicitur.” (4)“The … part of talk is to give the occasion; and again to moderate and pass to somewhat else”——“Danda igitur opera est, ut, etiamsi aberrare ad alia coeperit, ad haec revocetur oratio” (5)“to speak agreeably to him with whom we deal”——“Animadvertendum est etiam, quatenus sermo delectationem habeat” (以上 *De Off.* i. 37 に符合。) なお、Raynolds は指摘していないが、“turpe enim valdeque vitiosum in re severa convivio digna aut delicatum aliquem inferre sermonem” (*De Off.* i. 40) の話の場を考慮する必要を説いた箇所も上記(2)に符合する。
- (37) “Contentionis praecepta rhetorum sunt, nulla sermonis, quamquam haud scio an possint haec quoque esse.” Kiernan, p. 237 は、Raynolds もこの点については示唆していると推測している。
- (38) Works I, pp. 673-674, および, Works III, p. 411. “Of Discourse” の冒頭で、談話において Logic よりも Rhetoric の能力を重視する一般の風潮が明らかにされているが、このことから私的談話のレトリックが時代の要請であったことがわかる。
- (39) McKnight, pp. 125-126.
- (40) Howell, p. 366.
- (41) Plutarch Vol. I. 7 C; この箇所については、すでに Wright, p. 329 の指摘がある。
- (42) Plutarch Vol. VII. 546 F.
- (43) むしろこの箇所は、おせじにあまりうまくなり過ぎると自己の徳にとって不利になるという一文 “Men had need beware how they be too perfect in compliments; for be they never so sufficient otherwise, their enviers

- will be sure to give them that attribute, to the disadvantage of their great virtues.” (“Of Ceremonies and Respects” の1612年の加筆箇所, Works VI, 501) に符合。
- (44) Plutarch Vol. VII. 542 C-D. [Since towards one who praises himself the generality of men feel a great hostility and resentment, but do not feel so strongly against one who praises another, but often even listen with pleasure and voice their agreement, some, when the occasion allows, are in the habit of praising others whose aims and acts are the same as their own and whose general character is similar. In this way they conciliate the hearer and draw his attention to themselves; for although they are speaking of another, he at once recognizes in the speaker a merit that from its similarity deserves the same praises. For as one who vilifies another in terms that apply to himself does not deceive the audience, which sees that he vilifies himself rather than the other, so when one good man commends another he reminds hearers conscions of his merit of himself, so that they at once exclaim: “And are not you one of these?” (Loeb)] 以下原典の英訳はすべて Loeb による。
- (45) Plutarch Vol. VII. 547 F. [we shall avoid talking about ourselves unless we have in prospect some great advantage to our hearers or to ourselves.]
- (46) Works VI, p. 526, p. 565. cf. “To praise a man’s self cannot be decent, except it be in rare cases.” (“Of Praise” の1625年の加筆箇所, Works VI, p. 503)
- (47) Works VI, p. 456. 同箇所について, Goodenough, pp. 144-145 は Plutarch Vol. VII 546C “As it is one of the rules of health to avoid dangerous and unwholesome places, or being in them to take greater care, so ought there to be a like rule concerning converse and speaking of oneself.” (Goodwin’s Translation) を指摘。
- (48) Works VI, pp. 504-505.
- (49) Pliny, *Letters* v. 17. [All the more reason not to grudge him his success, for jealousy is a sign of inferiority. In fact, whether your own performance is better or worse or on a par with his, you should show your appreciation; for if your superior does not meet with applause neither will you, and it is in your own interests that anyone you equal or surpass should be well received.]
- (50) Raynolds, p. 359.

-
- (51) West, p. 240.
- (52) Abbott, II, p. 257; West, p. 240; Selby, pp. 276-277.
- (53) Plutarch Vol. II. 91 A. [Wherefore there must be no scanting of commendation or due honour in the case of an enemy who has justly gained a fair repute. For such an attitude wins greater commendation for those who bestow it, and inspires confidence, when later a man makes a complaint that he does so, not because he hates the person, but because he disapproves of the action. But best of all, and most advantageous, is the fact that a man is farthest removed from envying the good fortune of his friends or the success of his relatives, if he has acquired the habit of commending his enemies, and feeling no pang and cherishing no grudge when they prosper. And yet what other process of training produces greater benefit to our souls or a better disposition, than does that which takes from us all our jealousy and our proneness to envy?]
- (54) Plutarch Vol. I. 84 C. [We must therefore believe we are making but little progress so long as the admiration which we feel for successful men remains inert within us and does not of its own self stir us to imitation, In fact, love for a person is not active unless there is some jealousy with it, nor is that commendation of virtue ardent and efficacious which does not prod and prick us, and creat in us not envy but an emulation over honourable things which strives earnestly for satisfaction.]
- (55) *Essays* にみられる Plutarch の影響の痕跡について、Raynolds の指摘は、“Of Envy”, “Of Love”, “Of Great Place”, “Of Superstition”, “Of Regi-ment of Health”, “Of Discourse”, “Of Anger”, “Of Vicissitude of Things” など 8 箇所にも及んでいる。また、Raynolds は指摘していないが、“All wise men, to decline the envy of their own virtues, use to ascribe them to Providence and Fortune.” (“Of Fortune”, Works VI, p. 473), および、“Envy, which is the canker of honour, is best extinguished ... by attributing a man’s successes rather to divine Providence and felicity, than to his own virtue or policy.” (“Of Honour and Reputation”, Works VI, p. 505) は “τοὺς δὲ ἀναγκασθέντας ἐπαινεῖν αὐτοὺς ἐλαφρότερος παρέχει καὶ τὸ μὴ πάντα προσποιεῖν ἑαυτοῖς, ἀλλ’ ὡσπερ φορτίου τῆς δόξης τὸ μὲν εἰς τὴν τύχην τὸ δὲ εἰς τὸν θεὸν ἀποτίθεσθαι.” (Plutarch Vol. VII. 542 E) に符合する。同じく *Essays* にみられる Plutarch の影響の痕跡について、Goodenough (1897) の指摘は 26 箇所にも及んでいるが、同論文において

- Raynolds (1890) への言及がみられないのは不可解である。すなわち、Raynolds の指摘した8箇所以外に、“Of Death”, “Of Seditious and Troubles”, “Of Empire”, “Of Wisdom for a Man’s Self”, “Of Delays”, “Of Innovations”, “Of Friendship”, “Of Greatness of Kingdoms”, “Of Riches”, “Of Ambition”, “Of Nature in Men”, “Of Custom and Education”, “Of Fortune”, “Of Youth and Age”, “Of Beauty”, “Of Faction”, “Of Praise”, “Of Fame” など18箇所に及んでいる。他方、Plutarch の方からみた影響史でベイコンの名を挙げているものとしては、河野与一訳『プラターク英雄伝』XII, 附録, p.195 がある。
- (56) Plutarch Vol. VI. 511 E. [For it is impossible to check the babbling by gripping the reins, as it were; his disease must be mastered by habituation.]
- (57) Ovid, *Metamorphoses*, ii. 127. [spare the lash, my boy, and more strongly use the reins.]
- (58) Plutarch Vol. VI. 514 E-F. [when men talk, it is either for their own sake, because they need something, or to benefit their hearers, or they seek to ingratiate themselves with each other by seasoning with the salt of conversation the pastime or business in which they happen to be engaged.]
- (59) Works XI, p.340.
- (60) Vol. VI. 502 B (*θεράπεια, φάρμακον*), 504 E (*νοσήματων*), 510 C (*ιατρειάν τῆς ἀδολοσχίας*), 510 D (*ἴαμα καὶ φάρμακόν*), 519 D (*τὸ νόσημα*); Vol. VII. 529 C (*ὅταν δὲ τρυφερῶ μέρει ψυχῆς καὶ ἀπαλῶ κολούοντα προσαγάγη λόγον*), 529 E (*πάθει βλαβερῶ συνέχεται*), 530 E (*τὸ νόσημα*), 536 C (*ὁ τοῖνον πρὸς πάντα τὰ πάθη χρησιμὸν ἔστι*), 543 A (*τὰ φάρμακα*), 544 C (*φάρμακα τῆς περιαντολογίας*) など多数。
- (61) ベイコンの医学的比喩については、拙稿「フランシス・ベイコンの批評理念—『学問の発達』における語彙論的考察—」pp.63-111, 「ベイコン『隨筆集』—初版献辞の書誌学的、文学的意義—」pp.105-119, 「フランス・ベイコンの言語観—伝達論的・認識論的視点の交錯—」p.207参照。
- (62) Ibid.
- (63) 村上陽一郎, pp.112-149.
- (64) Works VI, p.523.
- (65) Works VI, p.456.
- (66) Ibid.
- (67) Ibid. 同じ趣旨は AL (Works III, p.388), De Aug. (Works, I, pp.621-622) にもあらわれているが, Wolff, p.41, Raynolds, p.237, Storr and

- Gibson, p.504 が指摘するように、ベイコンは無知の知という Socrates の皮肉を “Sientiam dissimulando simulavit” と曲解している。Spedding によれば、この句の出典は “Socrates autem, de se ipso detrahens in disputatione plus tribuebat iis quos volebat refellere. Ita cum aliud diceret atque sentiret, libenter uti solitus est ea dissimulatione quam Græci εἰρηνοειτῶν vocant.” (Cicero, *Ac. Qu.* ii. 5. 15) (Works I, p. 621)
- (68) Ibid. “to speak agreeably”, および、ラテン訳 “apte loqui et accommodate” は, “the proofs and persuasions of Rhetoric ought to differ according to the auditors: … if a man should speak of the same thing to several persons, he should speak to them all respectively and several ways” (AL, Works III, p. 411) を思わせる。
- (69) Ibid.
- (70) Ibid.
- (71) [We must observe, too, how far the conversation is agreeable and, as it had a reason for its beginning, so there should be a point at which to close it tactfully.]
- (72) [And yet the same rules that we have for words and sentences in rhetoric will apply also to conversation.]
- (73) “When the mouth is out of taste, it maketh things taste sometimes salt, chiefly bitter, and sometimes loathsome; but never sweet.” (*Sylva Sylvarum*, Works II, p. 554), “On the other hand the taste of salt, sweet, sour, acid, rough, bitter, and the like; are as perceptible to those in whom the sense of smell is wanting or stopped as to any one else; that it is clear that the sense of taste is a sort of compound of an internal smell and a delicate power of touch.” (*Novum Organum*, Works VI, p. 164)
- (74) Works VI, p. 456.
- (75) Works VI, p. 456; 注15参照。“via regia” (王様の道) という表現は、ベイコンが生れた York House や Whitehall Palace などが立ち並ぶ付近から、近くに “Kinges bridge” がある Westminster Palace に至るまで、テムズ河畔にそって南北に走る「キング通り」(現在の Whitehall 街) を暗示させる。(Shakespeare’s England, II, pp. 162–163 掲載 “Norden’s Map of Westminster 1593”; 『サミュエル・ピープスの日記』巻末掲載地図「1660年代のロンドン(西部)」; *New Book of the Road* 参照。)
- (76) Works III, pp. 389–390. “Nevertheless, because we do account it a Chase as well of deer in an inclosed park as in a forest at large, and it hath already obtained the name, let it be called invention”

- (77) cf. “for he would ever interlace a moderate relaxation of his mind with his studies, as walking, or taking the air abroad in his coach, or some other befitting recreation” (Dr. Rawley’s Life of Bacon, Works I, p.12); および、そのラテン語版の加筆箇所 “Equitationem, non citam sed lentam, globorum lusum, et id genus exercitia.” (Works I, p.12, n. 1) ; “Bowling is good for the stone and reins; shooting for the lungs and breast; gentle walking for the stomach; riding for the head” (“Of Studies”, Works VI, p. 498)
- (78) Works VI, p. 456.
- (79) Works III, p. 394. “though the difference be good which was made between orators and sophisters, that the one is as a greyhound, which hath his advantage in the race, and the other as the hare, which hath her advantage in the turn, so as it is the advantage of the weaker creature.” cf. Wright, p.329; Abbott, II, p.209; Selby, p.229; Raynolds, p.237; Kiernan, p.238.
- (80) Works VI, p. 455.
- (81) Cicero, *De Officiis*, i. 37. [Accordingly, if the talk begins to drift off to the other channels, pains should be taken to bring it back again to the matter in hand—but with due consideration to the company present; for we are not all interested in the same things at all times or in the same degree.]
- (82) Works VI, p. 455.
- (83) Works VI, p. 456. ラテン語版では、すでに指摘したように、この箇所の最初の文に加筆が施されている。すなわち、“Etiam qui sermonis familiaris dignitatem tueri capit, [alliis vices loquendi relinquat.]” (そして、親しい談話の品位を保持しようと熱望する者は【他の者に話の番を残しておくように。】)は、“maximeque curandum est, ut eos, quibuscum sermonem conferemus, et vereti et diligere videamur.” [We must also take the greatest care to show courtesy and consideration toward those with whom we converse.] (Cicero; *De Officiis*, i. 38) に符合している。cf. “In which conversation, and otherwise, was no dashing man, as some men are, but ever a countenancer and fosterer of another man’s parts. Neither was he one that would appropriate the speech wholly to himself or delight to outvie others, but leave a liberty to the co-assessors to take their turns. Wherein he would draw a man on and allure him to speak upon such a subject, as wherein he was peculiarly skilful, and would delight to speak.” (Dr. Rawley’s life of Bacon, Works I, p. 12) Raynolds,

p. 236 で指摘されているように、Dr. Rawley のベイコン小伝に描かれているベイコン像は、“Of Discourse”の中でベイコンが述べている理想的な話し方を彼自ら実践していたことを証明している。

- (84) De Aug. では、聴衆によってその証明・説得の方法を変える弁論家が、聴衆の耳に応じて音色を調節する楽師に喩えられている。“Siquidem probationes et demonstrationes Dialecticæ universis hominibus sunt communes ; at probationes et suasiones Rhetoricæ pro ratione auditorum variari debent ; ut quis tanquam musicus, auribus diversis se accommodans” (Works I, p. 673) cf. “Of Masques and Triumphs”. “saltiness” 以外, “field”, “greyhound”, “hare” と同様, “leads the dance” (“*fig.* to take the lead in any course of action” の意味で c1325 *Coer de L.* 初出), および, “galliards” (“A quick and lively dance in triple time” の意味で1533年 Elyot 初出) もベイコン初出例ではないが、これらの比喩的表現を私的談話のレトリックに適用した点にベイコンの独自性、斬新性があると思われる。
- (85) Works VI, p. 456. OED は “To make a jade of (a horse) ; to exhaust or wear out by driving or working hard ; to fatigue, weary, tire” の意味では1606年 Shakespeare を初出例に挙げている。
- (86) OBD はベイコンの1625年第三版 *Essays* の献辞を初出例としているが、修正されるべきである。
- (87) “*absol.* or *intr.* To act as mediator or arbitrator. Also, to take a mediating view”.
- (88) “Jesting, joking, merriment ; ridicule”.
- (89) “*trans.* ‘To satisfy so as to stop complaint’(J) ; to be enough for ; to give contentment or satisfaction to” *absol.* の用法でベイコン初出。
- (90) “The fact or quality of touching, affecting, concerning, or relating to something ; relation, reference, concern”.
- (91) “The action of replying : a reply, response”.
- (92) “Circumstantiality of detail ; detailed and hence (*formerly*) circuitous narration ; circumlocution, beating about the bush ; indirectness”. *pl.* の用法でベイコン初出。

Bibliography

I. Primary Sources

- Bacon, F. *The Works of Francis Bacon*. Faksimile-Neudruck der Ausgabe von Spedding, Ellis und Heath, London 1857-1874. In *Vierzehn Bänden*. Stuttgart-Bad Cannstatt : Friedrich Fromman Verlag, 1963.

- . *The Works of Francis Bacon in Ten Volumes*. London : C. Baldwin, 1826.
- Cicero. *De Officiis*. Trans. W. Miller. The Loeb Classical Library. Massachusetts : Harvard Univ. Press, 1913.
- Ovid. *Metamorphoses*. In 2 Volumes. Trans. F. J. Miller. The Loeb Classical Library. 3rd ed. Massachusetts : Harvard Univ. Press, 1977.
- Pliny. *Letters and Panegyricus*. In 2 Volumes. Trans. B. Radice. The Loeb Classical Library. Massachusetts : Harvard Univ. Press, 1969.
- Plutarch. *Moralia*. In 16 Vols. Trans. F. C. Babbitt. The Loeb Classical Library. Massachusetts : Harvard Univ. Press, 1927.

II. Secondary Sources

- Abbott, Edwin A, ed. *Bacon's Essays with Introduction, Notes, and Index*. In 2 Vols. London : Longmans, Green, And Co., 1870.
- Ahrens, Rüdiger. *Die Essays von Francis Bacon : literarische Form und moralistische Aussage*. Heiderberg : Carl Winter Universitätsverlag, 1974.
- Arber, Edward, ed. *A Harmony of the Essays, Etc. of Francis Bacon, Viscount St. Alban, Baron Verulam, etc.* English Reprints. London : 1871.
- Cochrane, Rexmond C. "Francis Bacon and the Architecht of Fortune". *Studies in the Renaissance*, 5 (1958), 176-195.
- Dixon, C.J. ed. *A Preface to Bacon : Edited with an Introductory Essay*. London : Hutchinson Educational Ltd., 1963.
- Goodenough, Myrta L. "Bacon and Plutarch". *Modern Language Notes*, 12(1897), 142-146.
- Howel, Wilbur Samuel. *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700*. Princeton : Princeton Univ. Press, 1956.
- 神吉三郎訳, 『ベーコン随筆集』(岩波書店, 1935年)。
- Kiernan, Michael, ed. *Sir Francis Bacon The Essayes or Counsels, Civill and Morall : Edited with Introduction and Commentary*. Oxford : Clarendon Press, 1985.
- 河野与一訳, 『プルターク訳英雄伝』XII (岩波書店, 1956年)。
- Liddel and Scott, ed. *A Greek-English Lexicon*. Revised and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones, et al. New (ninth) ed., 1940, with a supplement 1968 ; rpt. Oxford : Clarendon Press, 1973.
- Lewis, Henry, ed. *The Essays or Counsels Civil and Moral of Francis Lord Verulam, Viscount St. Albans : with Introduction and Notes*.

- Putnam's School and College Classics. New York : G. P. Putnam's Sons, 1893.
- Lewis and Short, ed. *A Latin Dictionary*. Oxford : Clarendon Press, 1879.
- New Book of the Road*. Ed. by The Reader's Digest Association Limited in collaboration with The Automobile Association. London : The Reader's Digest, 1982.
- Oxford English Dictionary*. In 12 Vols. and a supplement. Ed. James A. H. Murray et. al., 1933 ; rpt. Oxford : Clarendon Press. 1970.
- Mallet, David. *Analyse de la Philosophie du Chancelier François Bacon avec sa Vie*. In 2 Vols. Leyde : Chez les Libraires Associés, 1756.
- 松浪 茂, 「フランシス・ベイコンの批評理念—『学問の発達』におけるその語彙論的考察—」, カリタス叢書14 (1979), 63-111。
- , 「ベイコン『随筆集』—初版献辞の書誌学的, 文学的意義—」, 『英学論叢』石井正之助先生古稀記念論文集 (金星堂, 1982年) 掲載, pp.105-119.
- , 「フランシス・ベイコンの言語観—伝達論的・認識論的視点の交錯—」, 梅米女学院大学英米文学会発行, 英米文学研究22 (1989), 203-229.
- McKnight, Georg H. *The Evolution of the English Language : from Chaucer to the Twentieth Century, Formerly Titled Modern English in the Making*. 1928 ; rpt. New York : Dover Publications, 1968.
- McMahon, A. Philip. "Francis Bacon's Essay 'Of Beauty'." *PMLA* 60 (1945), 716-759.
- 宮部菊男著, 『英語学』(研究社, 1961年)。
- Montagu, Basil. *The Life of Francis Bacon, Lord Chancellor of England*. London : William Pickering, 1834.
- 村上陽一郎著, 『西欧近代科学』(新曜社, 1971年)。
- 成田成寿注訳, *The Essays or Counsels Civil and Moral by Francis Bacon : with Introduction and Notes*, by Shigehisa Narita. Tokyo : Kenkyusha, 1948.
- 訳, 『ベイコン随筆集』世界の名著20 (中央公論社, 1970年)。
- Raynolds, Samuel Harvey, ed. *The Essays or Counsels, Civil and Moral of Francis Bacon, Lord Verulam, Viscount St. Albans, Edited with Introduction and Illustrative Notes*. Oxford : Clarendon Press, 1890.
- Schücking, Elisabeth, tr. and Schücking, Levin L., ed. *Francis Bacon Essays : oder praktische und moralische Ratschläge*. Stuttgart : Reclam, 1970.
- Selby, F. G., ed. *Bacon's Essays, Edited with Introduction and Notes*.

-
- London : Macmillan, 1889.
- Storr, F. and Gibson, C. H., ed. *Bacon's Essays, with Introduction, Annotations, Notes and Indexes*. English School Classics. London : Rivingtons, 1885.
- 高橋五郎訳、『ベーコン論説集』（玄黄社，1908年）。
- 白田昭訳、『サミュエル・ピープスの日記』第二巻1661年（国文社，1988年）。
- Walters, Marjorie. "The Literary Background of Francis Bacon's Essay 'Of Death.'" *Modern Language Review* 35 (1940), 1-7.
- 渡部昇一，「随筆家列伝 幸田露伴(二)『努力論』、『諸君』」（文藝春秋社，No. 4，1988年）掲載，pp. 176-178。
- 渡辺義雄訳、『ベーコン随想集』（岩波書店，1983年）。
- West, Alfred S., ed. *Bacon's Essays, with Notes, Index, and Appendix*. Cambridge : At the University Press, 1897.
- Whately, Richard, ed. *Bacon's Essays, with Annotations*. 3rd ed., rev. London : John W. Parker and Son, 1857.
- Wheatley, Henry B. "London and the Life of the Town" in *Shakespeare's England: An Account of the Life and Manners of His Age*. In two Volumes. Oxford : Clarendon Press, 1917.
- Wolff, Emil. *Francis Bacon und seine Quellen*. Berlin : Verlag von Emil Felber, 1910.
- Wright, W. Aldis, ed. *Bacon's Essays and Colours of Good and Evil, with Notes and Glossarial Index*. London : Macmillan and Co., 1862.
- 柳沼重剛訳，ブルタルコス著，『饒舌について』（岩波書店，1985年）。